「多数派ではない人々」が より生きやすい社会を目指すには

日本 × スウェーデンの国際ゲイカップルから学ぶ ダイバーシティ

講演要旨

CHIBA UNIVERSITY

セミナー概要

ダイバーシティへの理解促進を目的として2022年10月26日、千葉大学では、スウェーデンで同性婚し、多文化・多言語子育てを実践中の作家・YouTuberで「ふたりぱぱ」チャンネルを運営するみっつん氏を講師に迎え、オンラインセミナー「『多数派ではない人々』がより生きやすい社会を目指すには―日本×スウェーデンの国際ゲイカップルから学ぶダイバーシティ―」が開催された。セミナーの第1部では、みっつん氏が、自身の半生・LGBTQ+とは何か・スウェーデンの状況などについて講演した。第2部では、千葉大学を含む日本社会全体を、LGBTQ＋や外国籍市民（移民）など「多数派ではない人々」がより生きやすい環境にするためには何が必要なのかについて、ディスカッションを行い、続く第3部の質疑応答では、参加者の質問をもとに多岐にわたる意見交換をした。本講演の司会は多文化・多言語の背景を持つ人々の教育を研究する野村和之（千葉大学大学院国際学術研究院）が務め、社会学・移民研究の専門家である五十嵐洋己（同）と日本語教育学の専門家である本間祥子（同）が、第2部と第3部でコメンテーターを務めた。

みっつん氏略歴

愛知県名古屋市出身（**写真中央**）。夫のリカ氏（**写真左**）とは日本に在住していた2008年に知り合い、2011年にスウェーデンの法律に基づき結婚。2016年にサロガシー（代理母出産）で子（**写真右**）を授かる。その経緯は著書『ふたりぱぱ―ゲイカップル、代理母出産（サロガシー）の旅に出る―』（現代書館）に詳しい。また、訳書に『RESPECT ―男の子が知っておきたいセックスのすべて―』（同）があり、性の多様性のみならず、20万人近いフォロワーを抱えるYouTube上や各種メディアを通じて、ダイバーシティを世に問う活動を精力的に行っている。

第１部

講 演

講演当日の様子

1　みっつん氏について

現在の活動

私は普段どんなことをしているかというと、基本的には『ふたりぱぱ』と言う名前でYouTubeやブログをやっています。それと合わせて、いろいろな雑誌などに寄稿したり、去年はスウェーデンの本を１冊日本語に翻訳・出版したりと、さまざまな媒体で発信をしています。どんなことを発信しているかというと、私自身もゲイなのですが、LGBTQ＋の権利とか、LGBTQ＋の子育て、うちは代理母出産で息子を授かったので、生殖補助医療についての話もします。

名古屋・東京・ロンドン・ルレオでの暮らし

生まれたのは名古屋で、24歳ぐらいまでいました。このぐらいの時期に、「ゲイかもな、自分は」というのに気付きました。役者を目指して上京し、東京にいる間に今の夫であるリカと知り合いました。知り合ってからちょうど3年弱ぐらいのときに、夫が会社の転勤のような形で、ロンドンに職を得ました。「一緒に来る？」と言われたので、「じゃあ、行こうか」という話になって行くことになりました。ロンドンには5年弱住みましたがその間に、子どもを授かろうという話になり、準備を始め、それに合わせてブログを始めたのが大体2015年でした。その後、子どもが生まれたのをきっかけに、今住んでいる、夫の出身地であるスウェーデンのルレオにやってきました。

それぞれの街での生きやすさ

名古屋・東京・ロンドン・ルレオと過ごしていますが、何が「生きやすさ」に関係するのか考えたときに、それぞれの都市での生きやすさにランクを付けてみました。名古屋は星1つ、東京は星3つ、ロンドンは星4つ、ルレオは星3つになっています。ただ、これはもちろん年齢を重ねていくごとにいろいろな知識を得たりとかして、自分で生きやすくしてきた部分があるとは思います。

例えば、ルレオとロンドンの大きな違いは都市の大きさです。ルレオはロンドンと違って小さい街で、人口は7万8千人ぐらいと少ないです。全世界的にゲイは都会に集まりやすく、田舎のほうはゲイがまず少ない。ルレオではゲイが少なく、子どもがいるレズビアンのカップルはすごくたくさんいますが、子どもを持っているゲイはほかにいません。自分たちは少数派というか、多数派ではないと感じる瞬間がよくあります。

だから、「生きやすさ」は、多数派かどうかというところだけではなかなか測れないということは、お話ししておきたいです。もともと名古屋も東京もロンドンもずっと大都市だったので、ルレオのような小さい都市で暮らすのは初めてでした。そういう部分でとても新しい発見があったと、私自身は思いました。また、「多数派」イコール「幸せ」でもないし、「少数派」イコール「不幸」でもないと、いろいろな街で暮らして、いろいろな人に出会って感じるようになりました。

2 LGBTQ+とは？

そもそも、「LGBTQ+って何だろう？」という話を、ここで一度おさらいをしたいと思います。LGBTQ+は十把一絡げにされがちですが、細かく見てみると、それぞれの困り事などはやはり違っています。大きく分けると、自分が誰を好きになるかという「性的指向」と、自分の性別をどう感じるかという「性自認」の2つだと思っています。大きく分けると LGBTは「LGB」と「T」に分けられます。例えば私は「G」の「Gay（ゲイ）」です。自分は男性だと思っていて、男性のことが好き。自分の好きな性別が男性に向かっている、同じ性別に向かっているのでゲイですね。「L」は女性同性愛者という意味の「Lesbian（レズビアン）」、「B」は男女ともに恋愛対象となる「Bisexual（バイセクシャル）」です。一方「T」は、生まれた時に割り当てられた性別に違和感をもち、その性別とは違う性別を自認する「Transgender（トランスジェンダー）」となり、日本語では現在「性別違和」や「性別不合」と呼ばれます。「Q」は「Queer（クィア）」と呼ばれ、元は「変態」というような意味の侮蔑語でしたが、それまでの男女二元論に当てはめられたくないと考える当事者が、誇りを持ってその言葉を自称するようになった歴史があります。そして人間の性のあり方はスペクトラムで、この5つに分けられるものではなく、その他多くのセクシャリティを包括した言葉として「+」がつけられることが多くなりました。

カミングアウト

私はゲイという自認があり、こういう場所でも「ゲイだ」ということを大っぴらに話しています。ただ、すべての人がそのように大っぴらにできるわけではありません。このような「カミングアウト」について、少しだけ話します。本当にこれは大切なことですが、カミングアウトは、本人が本人のタイミングでいいと思ったときにするものです。「絶対カミングアウトしなきゃいけないものではなく、自分の心の準備ができた時にするもの」です。私の場合、大体20代ぐらいの頃から、周りの友人に少しずつ話し、東京に出てだいぶ気楽になって、話せる人が増えて、30歳になって初めて親にカミングアウトをしたという感じです。

雪が積もる冬の家族団らん

発信する理由

そして、私がこうやって話をしたりとか、発信したりするようになったことには、2つの理由があります。

1つ目の理由は「情報がない」ということ。私たちは、子どもを持つためにいろいろな情報を集める必要がありましたが、必要な情報が日本語ではなかなか見つかりませんでした。一方で、英語での情報やアメリカの情報にはアクセスできました。日本語の情報がないとなったときに、「自分たちは英語にアクセスできたから良かったけど、日本語であったほうがいいよね。ないのだったら自分で書こう」と思ったわけです。

2つ目の理由は「演劇」にあります。元々役者をやっていた私は、ロンドンで移民向けの演劇ワークショップで演出助手をやっていました。そのときに、移民としての立場で声をなかなか挙げづらい人たちがいることを知り、声を挙げることの重要性に気づきました。本来なら平等に扱われるべき人が辛い立場に置かれている、そしてそれが社会の中でないことにされている、そういう部分に光を当てるために、演劇という手法を使って社会に発信していくという作業を学びました。

どのような社会にもすでに「多様性」はあると私は思っています。それがただ見過ごされてしまっている、可視化されていない部分があるだけなのではないかという気がしているので、誰もが声を挙げやすい環境を作ることが大事だと思い、このような活動に力を入れるようになりました。

3 誰もが生きやすいスウェーデン？

スウェーデンはかなりポジティブな印象のある国だとは思いますが、「本当にそんなにいい国なの？」というところを、いい部分も悪い部分も含めて伝えたいと思います。

スウェーデンの移民・難民問題

スウェーデンでは、移民問題が大きく取り沙汰されています。基本的に、「みんな移民を寛容に受け入れたい。それでも問題が出てきてしまう」のような感じで捉えてほしいです。例えば、移民を寛容に受け入れる取り組みの1つに、「子どもがルーツとなる言語を学ぶための教育機会を保障すること」があります。その自治体で、ある言語を話す小学生以上の子どもが5人以上いると、その子たちを集めてその言葉のクラスを地方自治体がやってくれる制度です。自分たちのルーツを、多文化を大切にするという考えがあります。その一方で、やはり問題になるのが「コミュニティの分断」です。誰かが分断しているというよりも、自然と分かれていってしまう。私もスウェーデン人の友達がいますが、それよりも日本人の友達といると楽だし、居心地が良い。その上、労働格差の影響で住む地域も偏る傾向があり、特に移民1世はなかなか交わりにくいのが現状です。

スウェーデンにおけるLGBTQ+の権利（主に同性愛者）の歴史

私はスウェーデンで同性と結婚していますが、スウェーデンは過去、同性愛に対して寛容ではなかった時代があります。昔は、同性愛が精神的な病気として扱われ、寛容とは程遠かったのですが、1970年代から変化し、国が精神的な病気ではないことを認め、差別禁止法の対象に含められました。そして1995年には、もともとあった事実婚の制度に同性カップルが含まれるようになり、同性間の法律婚が認められたのは2009年。その後、子を持つ権利や生殖補助医療の保険適用を受けることができるようになるなど、日本から見ると先進的というか、急進的に見える部分があるかもしれません。スウェーデンはなぜこんなに早く変化できたのか、そこには国民と政治の距離が関わってきます。

国政選挙の投票率と幼稚園での民主主義教育

2018年の国政選挙では、全世代の投票率が87.2%、18歳から29歳ぐらいまでの若者世代の投票率が84.9%で、日本（全世代53.7%・若者世代32.4%）と比べるとかなり高く感じると思います。もちろん、スウェーデンは理想郷ではありませんが、ここでは社会問題について、国民の間で諦めずに解決策を見いだしていくための議論が続けられている、というのが私の印象です。そして、それが高い投票率に表れているのだと思います。なぜこれほど高い投票率が生まれるのか。その理由について私が注目したいのは、幼稚園での民主主義教育です。スウェーデンの幼稚園のカリキュラムの冒頭には、「幼稚園は（学業的な）学びの場でもありつつ、人々は多様であることの価値に出会う場所でもある」と書かれています。全ての人間が画一的な同じ考えを持つのではなく、多様な考えを持つことの方が自然であり、幼稚園の先生たちは「答えを与えるのでなく、子ども同士の対話を促す」ことに重きを置くことで、対話を続けることが民主主義であることを、教えるのではなく自然と体現させる環境づくりをしています。

4 なぜ、「多数派ではない人々」が生きやすい社会を目指すべきなのか

駆け足でいろいろ話してきましたが、最後に今回のテーマである、「なぜ、『多数派ではない人々』が生きやすい社会を目指すべきなのか」について私の意見を話したいと思います。

ゲイという多数派ではない者の立場からすると、多数派の人たちが享受しているものが私には享受できないことは、とても不平等・不公平だと感じます。しかし、逆に私が多数派に回る場合もあります。例えば、私はシスジェンダーの男性（生まれたときに割り当てられたジェンダーに違和感がない男性）なので、女性に対して有利な男性性をずっと享受して生きてきたかもしれませんし、トランスジェンダーの人から見れば明らかに多数派になります。誰しもがマジョリティ性とマイノリティ性を同時に持ち合わせていて、時と場合によって、多数派になったり、多数派ではない人になったりするわけです。そうなると、「『多数派ではない人々』が生きやすい社会を目指す」ということは、強いものが弱いものを助けるという単純なことではなく、異なる立場の人間の意見を聞きながら対話を続けていくことで、回り回って最終的には自分のことを助けることにつながったり、自分自身も生きやすくなる社会になることにつながったりするのではないかと、私は考えます。「『多数派ではない人々』が生きやすい社会を目指すことは自分の生きやすさにもつながるのだよ。だから、みんなで話をしていこうよ」というのが、発信を8年ぐらい続けてきて感じていることです。

第２部

ディスカッション

ディスカッションの様子（左上から時計回りにみっつん・野村・本間・五十嵐）

1

ダイバーシティとは何だろう？

野村　まず、最初のディスカッションのテーマは「ダイバーシティというのは何だろう？」です。みっつん、ダイバーシティは何なのでしょうね。難しいですよね。

みっつん　難しいけど、これまでの歴史の中で、「人間はこうあるべき」みたいな固定観念ができてしまったなかで、「でも、本当はそうじゃないよね、本来の姿に戻ろうよ」とすることこそ、本当の意味でのダイバーシティ、多様性なのかと、最近は感じています。

野村　そうそう。例えば、日本の大学はおじさんばかりですよね。

五十嵐　そうですね。日本社会では年配の男性、おじさんが権力を持ちやすいですが、大学はほかの企業に比べれば、学部によっても違いますけれども、女性は多い傾向にあるとは思います。ただ、もちろん日本は、おじさんが力を持ちやすい社会であると思います。

本間　大学の先生という仕事は、女性が結婚して妊娠して出産してという、ライフステージが一番変わりやすいときが自分の研究でも頑張らないといけないところと重なってしまう。それで仕事が続けられない研究者を見たことがあるので、これまで男性の価値観で回ってきたのかなと思っています。ただ、最近では、採用のときに「女性を優先して採用します」というような所があり、多様性が少しずつ認められるというか、今まで光があまり当てられてこなかったところにエンパワーメントされてきているとは感じています。

野村　私、実は、香港に12年住んでいました。香港は今、ちょっと難しい状況になっていますが、ジェンダー平等指数がアジアで一番高いのです。なので、ジェンダーというものをほぼ意識することがありません。だから、日本に帰ってきて、「何で男の人と女の人ってこんなに差があるのだろう」ということを考えさせられることもありました。

2

「伝統を理由にLGBTQ＋の権利拡大は認めたくない」－この意見を認めるべきか？

みっつん　私が、「同性婚を認めてください」的な話をすると、「いや、僕らもこういう意見があるのだから、僕らの意見は少数派じゃないか」みたいなことを、逆に言われたりもします。そういう意見があることは認めます。その上で、「でも、僕は違うと思うよ」ということはずっと言い続ける感じにはなるのかな。

五十嵐　私はLGBTQ＋の権利拡大を一種の勢力争いと捉えることに疑問を感じています。闘いと捉える必要はないというか、それぞれが与えられた人権を保障されるべきという話であって、あちらが何かを得ると自分たちが何か失う、という勢力争いのような捉え方はふさわしくないのではないかと思います。

本間　私はこの「権利拡大」という言葉に込められた意味をみっつんさん

に、ぜひ話してもらえたらうれしいなと思って、今聞いていました。

みっつん　そうですね、「別に、『権利拡大』ではなくて、ただ、『同じ権利ください』って言っているだけ」なので、そこには反論の余地が大いにあるとは思います。

野村　別に、誰かが何かを得ると他の誰かが損をするという話ではないのだけれども、そういうふうに捉えている人たちもまだいる。だからこそ、誰もが社会に平等かつ公平に参加できることが、もっと基本的な価値観として広まってほしいと感じますね。

3

何だろう？「生きづらさ」と「生きやすさ」

みっつん　子どものときは、男を好きになる男が他にいるとは思っていなかったわけですよ。だけど、東京に出てみたら、自分と同じような人がいるのでかなり救われました。だから、「仲間をつくること」と「正しい知識を得ること」の2つが私にとってはよりどころになった部分かなとは思います。

本間　悩んでいることを自分の中で言葉にしていくことが、大事ではないかなと。自分1人の力だと辛いこともあったり、社会はなかなか変わらなかったりするけれども、そのことに対して、自分が言葉を通して折り合いをつけていくというか、納得していく、それを自分と関係のある周りの人たちと一緒にやっていくことが、ひとつ大事なのではないかと思っています。

五十嵐　みっつんさんはYouTuberとしてルレオから日本ともつながっています。「生きやすさ」の度合いは、YouTubeでいろいろな人からコメントをもらったり、発信したりする、つながれるコミュニティがあるからこそ、高まっているのではないかと思うのですが。

みっつん　本当にそのとおりですね。本当は育休が終わったらスウェーデンからロンドンに戻る予定でしたが、いろいろなことがあって残ることになりました。そうすると、自分で選んだ場所ではなかったから、最初はものすごく戸惑ったし、馴染めずに辛い時期もありました。でも、YouTubeで自分の生活をシェアする状態になってから、つながりができたり、日本社会もこんな家族を受け入れるようになってくれたりしているのだと、それまでは全然予想もしていなかった状況になり、「ああ、やって良かった」と思えるし、今、ここで暮らすことの力にはすごくなりました。

家族3人で祝うクリスマス

第３部

質疑応答

キッチンでお菓子作り

質問 1

私の母は、「同性を好きになる気持ちが分からない」と言い切っているのですが、私はその類いの人間です。とても言い出せそうにないです。どのようにすれば円満にカミングアウトが終わるのでしょうか。

みっつん　私が親にカミングアウトしたのは、30歳で結婚したときでした。もちろん、カミングアウトするときは、「直接言おうかな」とも思いましたが、なかなか言えませんでした。でも、移住も決まったし、結婚も決まっているから、さすがに黙って日本を離れるわけにはいかず、「今言わないと」という事情がありました。そこで、16ページの手紙を書いて送りましたが、後からきょうだいに聞いたところ、親はパニックになりました。うちの場合はきょうだいが親を安心させるため、「何があってもあいつのことは面倒を見るから」と親に言ってくれて、親も納得したようです。直後はまだぎこちない部分がありましたが、時間が経つにつれだんだん理解していってくれました。今では、孫を連れて帰るようにもなり、もう当たり前というか、親も慣れたようです。私が一つ伝えられることは、親子であろうと別人格だから、人の気持ちはなかなか分からないものだということを、自分の中に1回落とし込んだほうが楽になると思います。だから、お母さんが、「好きになる気持ちが分からない」と言うのを、「そんなもんだよね。分かるはずはないよね。でも、分からなくても、自分はこうだということは知っておいてほしい」と、お母さんと自分の気持ちをちょっと切り離して考えると、ご自身が楽になると思います。親子だからこそ難しい部分がある。でも私は、親が自分のことをすべて分かる必要はないし、別人格だから逆に「親にそういう部分があるのもしょうがないよね」と切り分けて考えるようにしてきました。

質問 2

LGBTの友人からカミングアウトされたときの対応についてお聞きします。どのようなマインドセットで臨めばいいものでしょうか。

五十嵐　私の友人でもいろいろな人がいます。私が意識するのは、心を使う。その人が言っていることを、ただ単に聞いた情報を受け止めることです。でも、いろいろ頭が働いて、ステレオタイプに基づいて解釈してしまおうとしがちですが、それを一旦シャットアウトして、その人のことのみを、心で理解しようとすることが大事だと、いつも思っています。

本間　私は何か特別なことに気を付けているということは全くありません。その人と自分との関係性をすごく大事にして、その中でどんなふうに接していくかを考えるぐらいです。

野村　そうですね。結局、人間と人間ですからね。

質問 3

同性愛者の友人から恋愛相談をされるのですが、同性愛者ではない私にはその気持ちが分からず、相談されたところでどう解決できるのか分からず悩んでいます。

野村　私は、この質問を目にしてまず「同性愛と異性愛ってそんなに違うのかな？」と疑問に思いました。みっつん、どうですか。

みっつん　私も、今、全く同じことを思ったし、「本当に何が違うの？」と聞いてみたいです。もちろん、ジェンダー・性別・性的指向・性自認などで傾向が出てくることはありえますが、結局は個人次第です。異性愛の友達と話していても、恋愛に方程式などはないことが分かります。そんな方程式があるなら、みんな円満に離婚もなく生活できているはずです。異性愛の中でもそのくらい全然違っていて、個人次第である以上、相手の話をしっかり聞くだけでいいと思います。相談は、話せば解決するような場合もあります。

野村　仮に解決ができなくても、話すだけで気持ちがすっきりすることもあるかもしれません。まずは相手の話を丁寧に聞くから始まるのだと、私も思います。

五十嵐　間違うことも多々あります。そこで何か余計なことを言ってしまうかもしれませんが、「私はあなたに向き合っているのだ」という姿勢が大事です。それは多分、中途半端な意見よりも相手に伝わると思います。やはり、人間と人間ですよね。

質問 4

スウェーデンは、例えば、子どもへの性教育やジェンダー教育はどういうふうに行われているのでしょうか。

みっつん　基本的には、UNESCOの包括的性教育に関するガイダンスを基に、発達時期に合わせて必要なことを適切に伝えることが基本となっています。例えば、妊娠については幼稚園の頃から話されていますが、性交に関しては小学校です。また、性教育という科目があるわけではなく、化学・生物・社会などいろいろな教科に散りばめられていて、継続的に行われます。

野村　元小学校教員の本間さん、今、日本では性教育はどういう感じで行われていますか。

本間　私が知っている範囲になりますが、私が働いていた環境では、そういう教育はほとんどされていませんでした。ただ、教科書に何も載っていないわけではないので、人間の体のつくりなどが事実として淡々と教えられていますが、それを自分事として捉えるための教育はまだまだされていない気がします。

みっつん　セックスのことを教えたら、みんなが興味を持ってセックスするようになってしまうと言う人がいますが、実際には、スウェーデンの調査では、正しい知識をきちんと丁寧に教えることで初交年齢が上がっていくというデータも出ています。正しい知識を適切な年齢に合わせ伝えることで、望まない妊娠や同意のないセックスによって傷つく人間を減らすことができると言われています。それに関しては、『RESPECTー男の子が知っておきたいセックスのすべてー』（インティ・シャベス・ペレス著／現代書館）をぜひ読んでください。スウェーデンで2010年に刊行された本を、私が日本語に翻訳しました。セックスと性的同意についての本ですが「異性愛と同性愛の『愛』って何も違わないよね」ということも、フラットに書かれているので、とても分かりやすくて良いと思います。青少年向けに書かれている本なので、言葉遣いもだいぶ平易です。

質問 5

みっつんさんの心に一番残っている言葉は何でしょうか。

みっつん　昨日たまたま、誰の言葉か覚えていませんが、今日のテーマに関わることがFacebookのタイムラインで流れてきました。「社会は人であり、人は社会である」という言葉です。社会は個人の集合体です。社会の話をすると自分という個人とすごく懸け離れたものに感じてしまう部分があると思います。でも、自分という個人も社会の中に含まれていて、結局は人が変われば社会が変わる。今まで残ってきた社会や伝統は変化の結果。「伝統を残したいから」と言って変化を怖れていると、社会はどんどん廃れていくでしょう。社会は変わるものであり、人が変われば社会が変わるということを意識していきたいと、今日、改めて思いました。

北極圏の入り口で記念撮影

北極圏の空に映るオーロラ

あとがき

3時間にわたった本セミナーは、当初長丁場かと思われたが、いざ始まると活発な話し合いが途切れることはなかった。最大で114人もの方々が参加してくださり、心より感謝申し上げる。みっつん氏の言うとおり、社会は人が変われば変わっていくものである。この意識を胸に、誰もが「生きやすい」社会の実現に取り組み続けようと思う。【野村】

令和2-7年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）
千葉大学グローバル・ダイバーシティ研究者育成事業
ダイバーシティ推進活動支援制度

「多数派ではない人々」がより生きやすい社会を目指すには
–日本×スウェーデンの国際ゲイカップルから学ぶダイバーシティ–
講演要旨

令和5年2月1日発行

文責　野村和之・五十嵐洋己・本間祥子（千葉大学大学院国際学術研究院）
編集協力　飯田梓（千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程）
デザイン　Studio Chihirita

発行　国立大学法人千葉大学運営基盤機構ダイバーシティ推進部門
〒263-8522
千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
TEL/FAX　043-290-2020
E-mail　diversity-office@chiba-u.jp